

はじめに

1980年代、90年代にメキシコ経済は大きく変貌を遂げた。1982年、87年、そして94年の3回にわたる経済危機への対応の過程で、政府は、従来の輸入代替工業化から市場原理を重視した新自由主義へと、開発戦略を大きく転換させた。新戦略下での経済改革はもはや後戻りできない段階にまで進行している。

そのように変貌を遂げるメキシコ経済において近年注目されるのは、民族系大企業の台頭である。対外債務の累積、経済不況、市場開放による競争の激化等々、企業をめぐる経済環境は厳しい。にもかかわらず民族系大企業は、対外債務返済交渉をしたたかに乗り切り、大規模なリストラの断行により国際競争力を向上させ、民営化政策の好機を捉えて有力公企業を傘下に取り込み、着実な発展を遂げているのである。さらには、アメリカやラテンアメリカ諸国に進出を果たし、多国籍化する企業も出現している。民族系の中小零細企業が、新たな開発戦略への適応に苦闘し、あるいは淘汰の道をたどるのは対照的である。

このような民族系大企業の台頭がなぜ可能となったのか。民族系大企業の力強い成長——そしておそらくはその限界——の背後にある成長の論理を解き明かすこと、それが本書のねらいである。しかし、本書が対象とするのは主に1980年代より以前の時期までである。あえてこのように対象時期を設定する理由は、民族系大企業の台頭を可能にした企業の側における条件が、経済改革が実施される以前の成長過程において醸成されたと考えるためである。本書全体でその論証に努めたつもりであるが、はたしてその試みが成功して

いるか否かは、読者の判断に委ねたい。

本書は五つの事例研究を中心に構成されている。このうち三つは既発表論文に加筆、修正を加えたものであり、二つは本書のための書き下ろしである。それに本書の問題意識と研究史上の意義について述べた序章と、五つの事例研究から一般化を試みた終章をつけ加えた。三つの事例研究の初出は以下のとおりである。

第3章：「メキシコの工業化と民間部門——鉄鋼業におけるフンディドーラとイルサの事例」（星野妙子編『ラテンアメリカの企業と産業発展』研究双書 No. 468 アジア経済研究所 1996年）

第4章：「メキシコの経済発展と民族系企業の形成——ビンボー・グループ（製パン業）の事例——」（『アジア経済』第31巻第10号，1990年10月）

第5章：「メキシコの民族系企業グループの発展要因——自動車部品工業におけるデスク・グループの事例」（『アジア経済』第31巻第1号，1990年1月）

筆者が民族系大企業に注目し、その研究を始めたのは1984年にアジア経済研究所の海外派遣員としてメキシコに派遣された頃に遡る。当時のメキシコ経済をめぐる議論において、民族系企業はブラックボックスのような扱いであった。メキシコ経済が抱えるさまざまな問題、例えば非効率、国際競争力やダイナミズムの欠如について、一般論としては責任の一端は民族系企業にあると指摘されながら、そのような一般論を支える実証的研究やデータは極めて乏しい状況にあった。以来、筆者の関心は、もっぱら、このブラックボックスの内部に光を当て、民族系企業の実態を明らかにすること、そして、メキシコの経済発展を、企業というミクロの経済の主体から捉え直すことに向けられてきた。本書はアジア経済研究所の1997年度の研究事業（課題名「メキシコの産業発展と民族系企業」）の成果である。しかし厳密に言えば、そのような、筆者の十余年にわたる研究の成果の一部をとりまとめたものである。